2017年度国際版画美術館事業報告書【展覧会版】

展覧会名	浜田知明　100年のまなざし	担当者名	学芸係　町村悠香
会期	2018年3月10日（土）～　4月8日（日）	開催日数	26日間
協賛・後援・協力	共催：読売新聞、美術館連絡協議会　協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網		
巡回館	なし		
展覧会概要	本展では戦後日本を代表する版画家・彫刻家の浜田知明を銅版画約90点、彫刻4点で紹介し、過酷な戦争経験を原点に、社会や人間そして自分自身をも鋭くユーモラスに表現し続けた作家のまなざしを追った。加えて浜田と前後して版画による新しい表現を追い求めた駒井哲郎らの作品も紹介、合計約150点を展示した。なお、2016年度にコレクターから約70点の貴重な浜田作品を一括でご寄贈いただき、翌2017年に作家が100歳を迎えた好機が重なり、本展の開催に至っている。		
ねらい・対象	浜田知明展はこれまで国内外で度々紹介されてきた作家であるが、戦争体験者が少なくなるなかその存在はますます重要となっている。本展では特にはじめて浜田氏を知る若い世代を意識し、過酷な経験を経て制作された作家の思いをいかに伝えていくかを工夫した。		

関連催事	催事名	開催日	タイトル	講師等	参加者数
	映画上映会	3月18日	映画「真空地帯」上映会	角尾宣信	33
	映画上映会	3月25日	映画「戦ふ兵隊」上映会	角尾宣信	36
	プロムナードコンサート（＊普及係実施イベン	3月17日		中里亜美	197
	作品解説	3月21日	館長によるスペシャルトーク	館長　村田哲朗	18
	作品解説	3月11日、4月7日	学芸員による作品解説	当館学芸員 町村悠香	75

観覧料	一般	65歳以上	大・高生
	600　円	300　円	300　円

観覧者数（　　現在）	有料計	無料計	総観覧者数	内、一般	内、65歳以上	内、大・高生	内、小・中生	内、その他
	2,409　人	1,087　人	3,496　人	2,335　人	954　人	130　人	75　人	2　人
	目標値							3,480　人

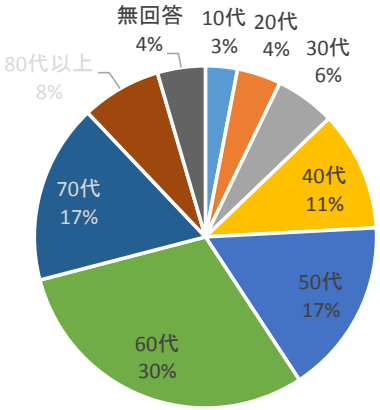
主な収入（　　現在）	観覧料収入	図録販売収入	受託販売収入	その他の特定財源
	990 千円	— 千円	162 千円	0 千円

事業経費			
	・展覧会協力謝礼	142　千円	計　2116千円
	・イベント委託料	0　千円	
	・作品展示撤去委託料	334　千円	
	・ディスプレー作成委託料	612　千円	
	・作品額装委託料	390　千円	
	・展覧会ポスター等作成委託料	620　千円	
	・著作権使用料	18　千円	

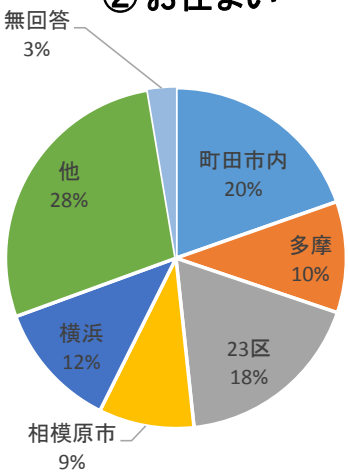
主な広報・取材等の講評	読売新聞（3月20日、21日多摩版朝刊：美連協連載枠、3月24日全国版朝刊　展評・芥川喜好「時の余白に」）、産経新聞朝刊（展評・3月25日全国版朝刊）、朝日新聞（展評・3月31日全国版朝刊）、新聞赤旗（展評・3月26日）、「インターネットミュージアム」取材記事						
アンケート結果	回収数	回収率	市民率	リピーター率	満足度(とても良かったと良かったの率)		
					企画の内容	展示作品	展示の仕方等
	265　件	7.5　%	20　%	63.7　%	98.5　%	98.4　%	89.6　%
	主なご意見	別紙のとおり。					
工夫と反省点と改善方法	予備調査	開催が決まった2016年秋頃から、浜田氏や関連作家に関する展覧会、講演会に積極的に足を運んだ。具体的な準備は、2017年9月中ごろから作品と文献にあたり、展覧会の構成と出品作品を検討し始めた。1月に熊本に出張し、浜田氏ご本人にもインタビューを行うことができた。						
	作品選択	5章構成のうち、1～3章は浜田作品を時系列で並べ、4章は関連作家の1950年代の銅版画作品、5章は戦争をテーマとした他作家を紹介した。4章の関連作家については、浜田氏と直接交流があった作家を中心に選び、1950年代に新しいメディアとして銅版画による芸術表現に挑んでいたことを切り口に紹介した。一方で「浜田知明展」という軸が最後までぶれないよう、4章、5章でも浜田知明の位置づけを明確にし、また作家独自の視点が感じられるよう工夫した。						
	図録作成	リーフレット（16ページ）を作成し、作家紹介、図版、リストを掲載した。来館者に無料配布したが、最終週には部数が足りなくなり、コピーを配ることで対応した。インタビューの際に撮影した浜田氏の近影を掲載し、作家を身近に感じられるようにした。章解説はなるべく平易なことばを心がけ、はじめて浜田氏を知った人にもわかりやすくなるよう工夫した。						
	ディスプレー	時系列で展示する1～3章と4章との切れ目が鑑賞者にとって歩きながら体感で分かるよう、あえて可動壁でデッドスペースをつくり、第一企画展示室の最後で3章が終わるようにした。出口付近に浜田氏の近影と、子どもに向けて語った新聞記事を展示し、また切り抜き文字をその上に貼ることで、浜田氏の問いかけが視覚的にもわかりやすくなるよう工夫した。						
	広報	若い層にも興味を持ってもらえるようメインビジュアルを選んだ。代表作《初年兵哀歌（歩哨）》ではなく、色彩が美しく、デザイン性も高い《月夜》を選んだことで、若い方にも一定数興味を持ってもらえたことがアンケートからも分かった。開始後早い段階で新聞で数社から取り上げていただけたことで、関西など遠方から足を運んでくださる方も少なくなかった。						
	イベント	作品の時代背景への理解が深まるよう、戦争をテーマとした映画の上映会を行った。解説者をたて、上映後に映画と浜田作品の関連を映画研究の立場から論じる機会を設けたことで、展覧会を新しい視点から多角的にみる機会を提供できた。ただ、予定時間を越えてしまったので時間配分には今後注意していきたい。						
	作品輸送	作品輸送なし。					
	展示撤去	立体作品の展示を初めて経験し、ケースの場所決めやライティングに苦労した。係内で助言、協力を得ながら展示をしたが、今後は事前準備を万全に行っていきたい。					
その他特記事項	展覧会終了後の7月17日に、浜田氏が天寿を全うされた。結果的に本展が生前最後の展覧会となったため、その後は問合せも多く頂いた。この巡りあわせを大事にして、今後も浜田知明作品を当館の重要なコレクションとして扱っていきたい。						

「浜田知明　１００年のまなざし」 展
アンケート集計結果
開催期間：2018年3月10日（土）～4月8日（日）
回答者数：　265　人（総入館者数：3496人　アンケート回収率：　7.5%）

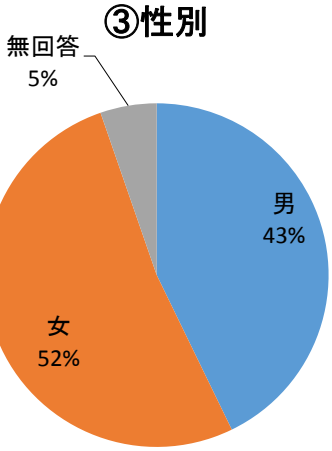
① 年齢層



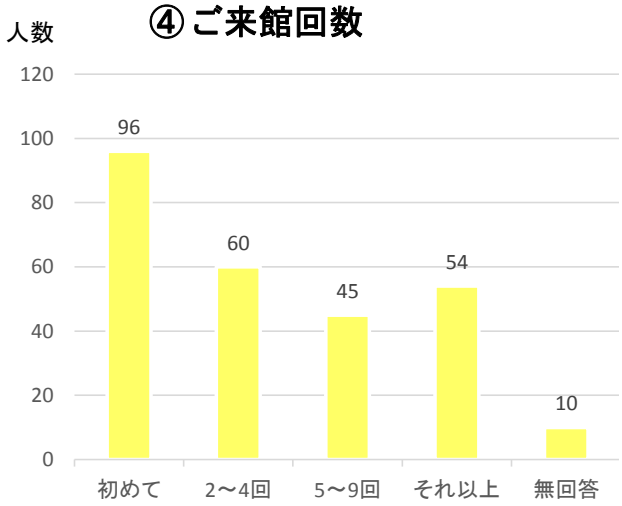
② お住まい



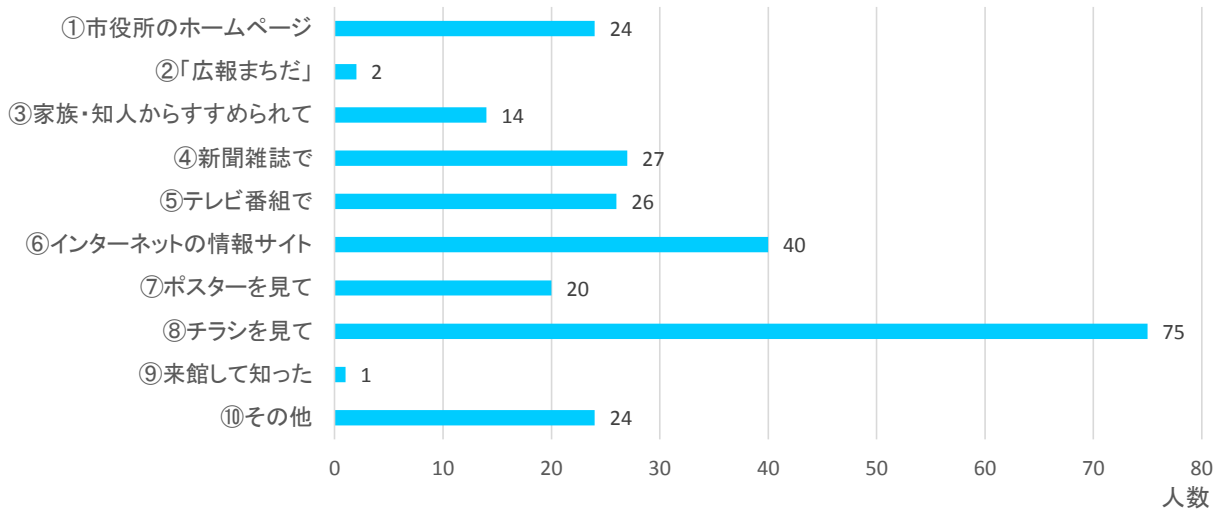
③性別



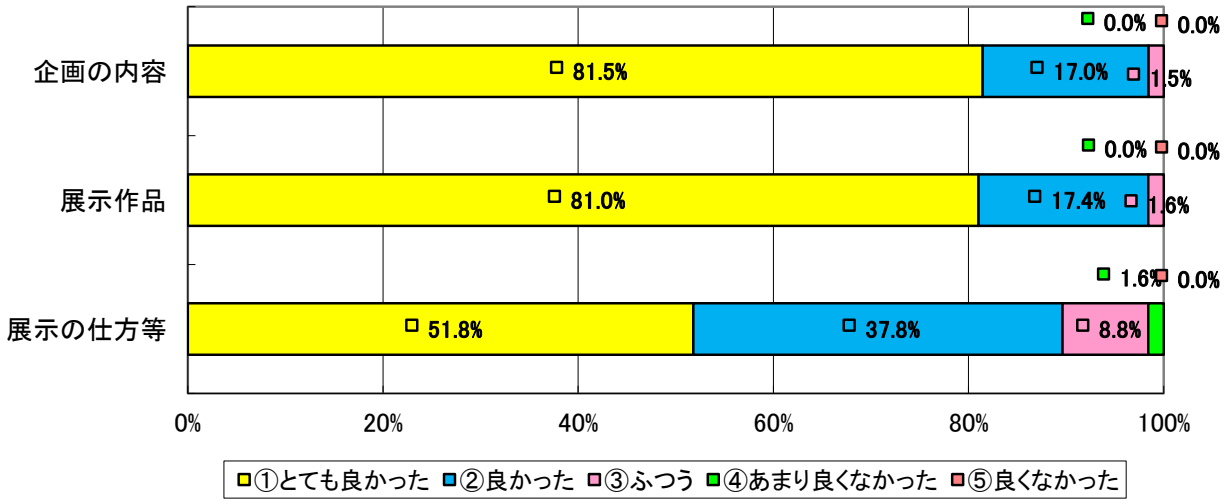
④ ご来館回数



⑤ 展覧会情報の入手



⑥ 回答者の満足度



⑦ 主なご意見・感想

◆今の時代にマッチした浜田さんの作品展を企画されたことに敬意を表します。熊本まで作品を観にいったことがあるが、都内にたくさん収蔵されている貴館があることを知りうれしくなりました。これからも町田でこのような展覧会を開催してほしい。◆最後に浜田さんが戦争について子どもたちに語った言葉の新聞記事があったのがとてもよかったです。加害者としての日本人もしっかり見据えた浜田さんの人物が伝わってきました。◆作家の誠実な人生の歩みが画風とともによく伝わってきた。作品に対する思いが良く伝わる展示だった。◆自らの経験を厳しく熟成させ、人間の存在の奥深い醜さや優しさを描き続けた浜田さんという人間に感銘をうけた。現代社会のいいかげんさの中でうごめいている多くの人間に鋭い問いを投げかけてくるようです。
◆私が中学生の頃、美術の先生として教えていただきました。懐かしさのあまり展覧会を観に来てしまいました。◆浜田知明という人を初めて知ったのですが、作品を通じてその人となりと作品とのつながりが少し判ったように思えよかった。◆《初年兵哀歌（歩哨）》を美術の教科書の副読本で見て以来、本物を観たいと思っていたので観られて良かった。実際の作品をみると、想像以上に迫力がありマチエールの美しさがすばらしかった。『初年兵哀歌』以外の作品も多く見られてよかった。
◆作品の展示順や関連作家が良く考えられていた。◆同時代の他の作家の版画作品が観られたのは版画美術館ならではだった。

【検討事項】
◆もう少し長い会期にするか、巡回してほしかった。◆とても良い作品が揃っていたので、ぜひ図録が欲しいところでした。◆キャプションの位置をもう少し高くしてほしい。◆企画展示室でも技法についての説明をしてほしかった。◆資料で字が小さいものは拡大してほしい。

目標人数に3480人に対して、総観覧者数は3496人であり、目標を達成できた。来館者層は60代が最も多く、次いで70代、50代だった。戦争に関わるテーマで、高齢層の興味を惹いたようである。また、リピーター率も比較的高かった。
展覧会情報の入手はチラシを見てきた方が最も多かった。今回は開催前から「美術手帖」ウェブ版で展覧会告知をしていただき、SNSでの拡散効果ためか、インターネット情報サイトをみて来館した方も多かった。新聞各社で展覧会評を掲載していただけたので、その効果も大きく会期末に向けて来館者数が伸びた。
意見・感想からは、浜田知明氏が戦争経験をテーマにしたことや、風刺的な主題が現代にも有効であることに深い意義を感じ、後世に語り継いでいきたいという声が多数寄せられた。浜田氏は生涯にわたり、作品を通して人間という存在の愚かさや優しさを鑑賞者に問いかけてきたので、作品の魅力が展示を通して引き出せたことに安堵した。
当初の狙いほどは若い層の来館は多くなかったが、初めて浜田知明氏の作品をまとまって観ることができたという声は多かったので、本展の狙いはある程度達成できたと考えられる。